

富山県民家調査

建造物研究室

1977年10月から78年3月にかけて、富山県下において民家調査を実施した。この調査は富山県教育委員会が国庫補助をうけて実施したもので、富山県におけるこの種の調査は1969年度に続いて2回目である。今回の調査の目的は前回の調査を補足し、重要文化財民家選定のための新しい資料を得ることにあった。当研究所は調査の依頼をうけ、現地での調査にあたった。

調査は1次から3次までの三段階にわかれる。1次調査では28の市町村から計301棟におよぶ古民家のリストの提出があった。このうち85棟について調査員が現地におもむき基礎的な調査を行い（2次調査）、さらにこのなかから16棟を選んで断面図、架構図などさらに詳しい資料を採取した（3次調査）。

調査の範囲はほぼ全県下にわたり、前回の1次調査で該当なしと報告のあったいくつかの市町村からも古民家リストの提出があり、2次調査も行なった。また前回は既往の調査があるということで2次調査を略していた五箇山地方の民家についても現地での調査を行い、多数の資料を得た。

調査した民家には農家、町家、漁家がある。これらは18世紀の後半から19世紀末にかけて、すなわち江戸時代後半から明治時代中頃までに建設されたものである。このうち18世紀にさかのぼる民家のごくわずかで、多くは19世紀にはいつてからの建築であった。建設年代の判明した家に富山市打出の大場義彦家（慶応4年「家作諸扣」）、同市宮尾の内山季友家（慶応4年・棟札）、砺波市太田の入道忠靖家（嘉永6年「家立替ニ附寄木買物覚并ニ石ツキ見舞家わたり見舞等覚」）、福野町安居の安川弘家（弘化3年・古文書）、福岡町元町の上野慶夫家（明治14年・墨書銘）がある。このうち内山家は建設当初からいわゆるアヅマ建の例として年代の判明する最古のもので注目される。このほか富山市岩瀬大町の黒瀬家は、明治10年頃の建築であるが、明治期の町家として質も高く意匠的にもすぐれており、農家では利賀村の野原傳松家が18世紀末の建築で、小規模ながらヒロマ上手部分の保存がよいことで注目された。

前回の調査の結果は富山県教育委員会発行の「富山県の民家」にその概要を記してあるが、今回の調査で農家の間取と分布について以下の3点の新知見を得た。

(1)前回結論を保留した県の東部においても、平野部にC型、平野部と山間部の中間にB型が分布していた。

(2)氷見市の農家の間取はB型に似るが、構造手法など総合的にみればむしろ石川県能登地方の民家との関連が強い。

(3)前回C型に分類した農家は細かくみるとヒロマとチャノマの関係から婦負・射水の二郡以東の平野部と、これより西の砺波の平野部と2つのタイプに分れる。両者はヒロマ上部の梁組仏壇の位置と向きにそれぞれ特色をもつ。

（中村 雅治）

富山県民家調査

上平村菅沼合掌集落

大山町荒木家外観

1 氷見市山崎善郎家現状平面図 2 平村高桑子家復原平面図 3 利賀村野原傳松家現状平面図（A型：
桁行中央にヒロマを梁間いっぱいにとる） 4 八尾町谷川光雄家現状平面図（B型：ヒロマが梁間いっぱいには
ひろがらず、ヒロマ後部にダイドコロ、カッチ、タナマエなどと称する部屋がつく） 5 富山市高林 昇家現状平面図
（C型：ヒロマの後部にヒロマとほぼ同じ広さのチャノマがつき、さらに下手にダイドコロ、イロリをもつ） 6 福
野町東田紀彦家現状平面図（C'型：C型と同様であるが、チャノマがヒロマと喰違い、やや上間側へ張出す）